



(京都東北部)

京都・慈照寺境内

- 1 所在地 京都市左京区銀閣寺
- 2 調査期間 一九九三年(平五)七月～一九九四年一月
- 3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 百瀬正恒・南 孝雄
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 室町時代から近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

慈照寺境内では一九八六年に庫裏の増改築に伴う発掘調査を実施した。今回の防災・防犯工事に伴う発掘調査は、境内における二回

目の調査である。

調査では、近世から室町時代の各時代の遺構を検出したが、室町時代の東山殿・慈照寺関係の遺構には、境内北西部で検出した園池、北部の石垣・石組み排水溝・花崗岩製導水溝・礎石建物・通路状遺構、南部の

観音殿(銀閣)の周囲で検出した暗渠排水溝・景石抜き取り穴・整地層などがある。

中でも、花崗岩製導水溝は特異な遺構である。まず幅六十cmの溝を掘り、三〇～五〇cm間隔に自然石の基礎石を置き、その上に花崗岩製の長さ九〇cm前後の導水溝の下石を据え付けている。下石は幅が三〇cm、厚さ二〇cmで、上面に幅と深さがそれぞれ五cmの溝を二条穿っている。下石の小口には刳り込があり、下石相互を強固に結合させる。蓋石は、長辺六〇cm前後で下石に比べて短く、幅一一cmで下石の二条の溝に対応して二枚被せていた。二枚の蓋石の接合は、二mmの薄い板を蓋石の側面(溝と同一方向)に入れ、接合部の上面には漆と布で目地をする。下石と蓋石の接合にも漆を使用し、側面も蓋石と同様、漆と布で目地をしている。導水溝の上部には薄く砂を被せていた。

墨書のある部材は、花崗岩の導水溝と同一方向の素掘り溝から出土し、長辺を溝と直角にし、穴のある面を上に向けていた。遺構の年代は、導水施設と溝が平行しないこと、施設の上部に堆積した砂層を掘り込んで遺構が成立することから、一六世紀中葉前後と考える。部材は、一辺一二cmの角材で、長さ二六cmで、中央部に径八・五cmの円形の穴が貫通している。墨書は、検出状況の上面に「上六」、側面に「納了」とあり、穴を中心に開けるために、十字に墨が打ってある。溝に穴を上に向けて据えてあること、墨書から

判断して、板塀の礎板で、穴に柱を建てたものと考えられる。

慈照寺境内では、今回を含め過去二回の調査が行なわれている。

旧庫裏を新築する工事に伴って実施した事前調査では、桃山時代からの歴代の庫裏の遺構を検出したが、室町時代の東山殿とそれに続く慈照寺の遺構は、溝を一条を検出しただけであった。

今回の調査で検出した園池、石垣と石垣に伴う排水溝、導水管、建物遺構は、いずれも室町時代の東山殿が造営された文明一四年（一四八二）から一六世紀中葉までの遺構であり、現慈照寺の北部にきわめて重要な遺構が密集していることが判明した。

東山殿は低地の園池、観音閣、東求堂などの遺構群と、高台の西指庵を中心とする遺構群で立体的に形成されていたと推定でき、慈照寺の北部域が重要な位置を占めていたことが判明した。

8 木簡の釈文・内容

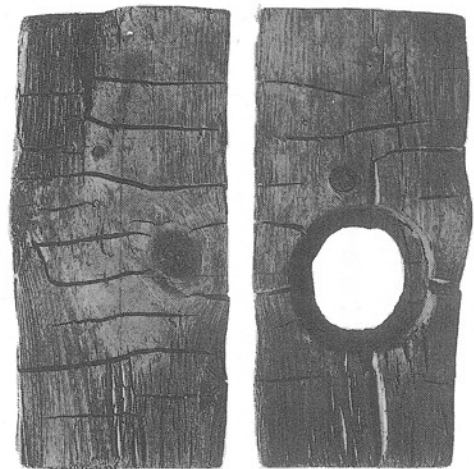
(1) ・「上六」（上面）

・「納了」（側面）

260×120×120 061

なお、木簡の釈読は、奈良国立文化財研究所の綾村宏・館野和己・古尾谷知浩・渡辺晃宏の各氏による。

（百瀬正恒）



（側面）

（上面）